

トピックス

近年気になる病害虫 ～イネごま葉枯病～

病害虫防除所が行っている水稻病害の調査結果を20年前と比較したところ、イネごま葉枯病で発生量の増加が確認された。7～9月の平均気温データと照合したところ、この状況は夏期高温化が要因の一つとなっていると考えられる。

内 容

近年、地球温暖化の影響と思われる記録的な夏期の高温が続いている。極端な高温は農作物への収量・品質に影響を与えるとともに、病害虫の発生様相、発生種、発生量にも大きく関与する。ここでは、本県において、夏期の高温が引き金と考えられ防除上問題となっているイネごま葉枯病について紹介する。

イネごま葉枯病は、葉に暗褐色のごま状あるいは不整形の病斑(写真)を生じる水稻の病害で、出穂後も籾や穂首などに感染し、穂枯れの原因となる。伝染源は汚染種子や本田の被害わら等である。ここ数年、本病の発生が増加傾向にあることから、2023～2025(23-25)年の気象と同年における本病の発生状況を、20年前の2003～2005(03-05)年と比較した。福崎アメダスにおける7～9月の3か月間の平均気温をみると、03-05年は25.0～26.6℃(平均25.9℃)であったのに対して、23-25年は27.5～28.3℃(平均27.9℃)と2℃上昇していた(図)。病害虫防除所が行っている水稻病害の巡回調査データをみると、本病は03-05年調査では調査期間を通して発生が認められなかったのに対して、23-25年では7～9月の平均発生圃場率が8.7%(2023年)～26.1%(2025年)と、これまでにない発生が確認された(図)。

本病は土壌養分、特に窒素、カリ等が生育後期に不足することで抵抗力が低下して発病が助長されるとの報告がある。03-05年は植物体が肥料切れすることなく抵抗力もあったが、23-25年には夏の高温により肥効調節型肥料の肥効が早まり、生育後期に栄養不足となって植物体の抵抗力が弱まり、発病が増加したと推察される。

夏期の高温化は今後も進行すると予測される。現在、病害虫防除所ではイネごま葉枯病の対策として、生育後期に栄養を確保できる施肥設計(臨機の追肥を含む)を推奨している。



写真 イネごま葉枯病の症状

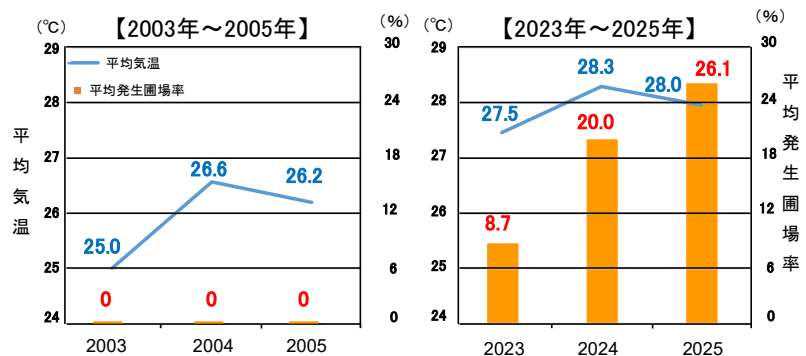


図 福崎アメダスにおける各年7～9月の平均気温と各年7～9月の巡回調査におけるイネごま葉枯病の平均発生圃場率
棒グラフ上の数値(赤字)は平均発生圃場率
折れ線グラフ上の数値(青字)は7～9月の平均気温

今後の方針

今後は、伝染源からの伝搬に着目し、物理的防除手法を含む防除体系を検討し、肥培管理などと組み合わせた総合的な対策技術の確立を目指す。

松本 純一 (病害虫部)